

Interview チャイコフスキー国際コンクール優勝 ゲルギエフ指揮 マリンスキー歌劇場管と共演 ダニール・トリフォノフ [ピアノ]

10月18日 [土] 15時開演 マリンスキー歌劇場管弦楽団 ワレリー・ゲルギエフ [指揮]
チャイコフスキー：ピアノ協奏曲第1番 [Pf トリフォノフ]：交響曲第6番「悲愴」ほか

◆◆◆ ピアノへの想い ◆◆◆

ピアノはどれも同じように見えますが、楽器にはそれぞれに特徴があります。新たな楽器を弾く時には、順応するまでに時間がかかります。ただ、そのあたりは言語と同じだと思います。よりたくさんの言語を知っているほど、新しいコミュニケーションを確立することが楽になりますよね。母国語しか話せなければ、新しい言葉を勉強することはより難しい挑戦になるでしょう。

僕はクリーヴランドで、1日で最低3種類のピアノで練習するようにしていました。そうしているうちに、新しいピアノに触れたとき、慣れるまでにかかる時間がどんどん短くなっていったのです。ここ数年、ファツィオリのピアノをよく弾きますが、ユニークでとても刺激的な個性を持っています。工房で一番新しいファツィオリを見せてもらいましたが、音の深み、豊かな呼吸、輝きを感じました。すばらしい経験でしたね。ピアノを選ぶときに大切なのは、楽器が自分の興味や関心を長く惹き続けるものか、音楽的な要望に答えてくれるものか、そして新しい表現を生み出すためのインスピレーションを与えてくれるものかという点です。もちろん会場の大きさなど考慮しますが、まずこの点をクリアしなければなりません。

◆◆◆ 表現者として ◆◆◆

僕は、自分を忘れてしまうような演奏ができるのはすばらしいことだと思いますよ。もちろん楽譜を忘れてしまうという意味ではありませんが(笑)。精神的な制約が取り去られ、自分自身が自由になること、そして、音楽の中に示唆されているものを聴くことが大切だと思うのです。そのためには音楽の世界に完全に集中していることが必要です。同時に、耳はいつも開いた状態でなくてははいけませんから、そのバランスを保つことは確かに簡単なことではありません。

重要なルールは、演奏する日には、気が散ることに触れないこと、そして作品がこうであるべきだという理想の檻に自分を閉じこめないことだと思います。そうでなければ、ステージでの感受性や繊細さを制限してしまうことになるからです。音楽とはその時、その特別な瞬間に起きていることですから、常に心は開かれていて、その時点で創造されることを受け入れられる状態でなくてはならないのです。瞑想の状態と似たようなものですかね？



そういえば、最近ヨガをしています。ヨガ、瞑想、気功は、どれもとても有益です。問題は、なかなか時間がとれないこと。それでも、コンサート当日はどれかひとは実行するようにしています。柔軟性の意味でもピアノに良い結果をもたらしましたし、長時間座って練習をしていることが楽になりました。調律師はコンサートのためにピアノを調律し準備しますが、私たちピアニストも、自分の体と心……つまり音楽を創るための楽器を“調律”して本番に臨む必要があるのだと思います。

◆◆◆ 日本のファンへ ◆◆◆

日本に行くのはいつもすごく楽しみです。ツアーが終わる頃には日本を離れるのが寂しくなります。初めて訪れる所沢は、マエストロ・ゲルギエフがとても愛するホールだと聞いていますから、その素晴らしいホールでチャイコフスキーを共演できるのは心から嬉しいです。たくさんの魔法のような瞬間とともに、音楽の喜びを皆さんと分かち合いたいと思います。